[illegible]論為辨抄

911.3
ジ
中

十論為辨抄　中

第四段

渡部狂編

虚実ノ変　白馬ノ原道訓に於テ虚実の変と
いふハ天地自然の名理にして儒釈老の三道より
揚て意指異いまして、いはゆる風雅に詩歌連俳の
名もまた分て十ノ変にあつかるもとしふれあり　そをまた
名と実とをいふ是をまた名をも実とし実をも名として
いつれにも其の建派（タテハ）にして是を不名を体代と
荘老あり是を蒙求の俳諧に禅家荘門の
言地を捨てて諷諫の和ともいはれて其変ハ世代
のうれゆへにおそれら先後をまつらんまつられども

儒仏のあらそひに歴々の学者達も虚実を論ずる人
の誠修とおもふ故に儒書仏経の表裏をときさとし
また言語文字の間にかかはり出ては生死の沙汰
よりて朝聞夕死の論あり是も生死の大事
といふを儒書にもその用ふれは大哉死乎やといひて
孔子にもすすめとぞつかはれ死生は非今之急後自知
之なりとも儒は今日の世代をとりてさへてさらに明日の因果
と偽きとも不知生則何知死をと人は今日の生代
なのりて明日の死とかかはらしむやはらかによりて死とは
知あらず秘して説からず儒の文として設て秘を
さらに仏家の教も死生は虚実として不知
虚則何知実のいひは当時に儒の学者も虚を

あらはれんとんのはしめよりも程子の生死を論ずるも
は如小児夜間不説思と云や是に儒仏の生死とある
人々を是に儒仏の虚実をしるあるへしにて天道の虚
実をしるにて大なる時は天地の未開と已開にて
小なる時は一念の未生と已生なりされとも虚実
と誠偽ともそれと以よの動不動にして聖人の
意にはつくと虚実をもしいひ凡夫のにはあつかふを誠偽
といふ子例に一歩の好悪とおもふ一しあれは虚実の天
理にして誠偽の人理なるを明らんはらは虚実の
先後を撃石閃電の隻にして畢竟は知不知の
さかひもはれは知とといふ不知とも一人は一虚ともある
時を放逸の凡人とあり人の一実とある時は偽仏屋

の庸人とあるは虚実の用とあるは賢人といへ〳〵虚実
の変化とあるを聖人といふまで賢くてそれ自利利他
此さらばあらんあるに虚実の虚実といふを然諸
家の秘密として虚実の実と云は天下のこと
あり虚実の虚とあれは天下の衆とあり畢竟は
名利の用と不用とをもあれども利益孔子もそこに
の寛大なるより虚の一字を搭揚して権といふ叔
といふにも書にも経の注に達して例の誠の事あれ
ちとて耳をそろえて皃かむとしふ世の諺もはる
るをもよして孔孟の権子論に朱氏程子の説
をとられば権稱錘也取中者也やいづれの文ら
中とのふけるた句にもし章にとれかくいふは公ゆる比

當然なりとはそしられて噯好のなまりなきはいかむ
そのふる之祖の孔夫子あつて君子欲言之見信
也莫善手先虚其内それ信の一字は的當
をし虚中のこゝろとあるをもしけねば子貢を
おとなしして回能信而不能反とそしるもあれ
權なしして虚なるさゑやはてその顔回とたかむる
とて屢空と子注は不以貧求富屢至
於空匱とある匱と櫃とは通用にて米櫃
は米のなきとすりやはし讃は全く貧富のはなは
なし朱説を一瓢の貧とすなるにて例の埒あか
ぬをもしるすなり夫子を讃と吐ゆりしかれども
儒門は大秘なるの空の字といふ屢の解説を

変のすあり。これらに瞻前忽後の讃とも
まうし誠ふけ人の組本あらそれハ採集
ハ虚実自在なるんに通ましともふけさなハ
孔子の残忍をおふて一してもの虚実の作文ならハ
或ハ管仲るにと評して家残於齊而無
憂色是知権命也事所射君通於變
也といへるまで合して虚実の時ふらねハしく
権と変との調あるにぞとも稱鑑と作まて
へきや孔子を偏屈の親にふ仕立ふる誠ふ
二程の比ちもといふもけ益ち一貫抄ふ知者と
可與ハとの二章とあつせて子路をとやつくる孫奭
あれハ鳴権の二字ふハ道の権謀なりとしろり

ましらハあるくの謀計ありてこそ子論語の正権ハ
さしらず原道の虚実あるたらんやそれをと論語
るハ媒しして儒佛老荘の糸ハ師をとにふへ虚
実らハ我家の一大事にして道ハ一字の信をと
へきさもそ称し佛ハ此段とて十論の大綱として
実に虚実の変あるすとまつる実に論語の
世にちるすとまる一

勧懲先後

師説ふ勧善懲悪と子ハ師家
の教誡とのちあれふる教と誡とに二字あれ
ハ勧と懲とに二用ありこれを佛説ふハ
善悪の報をとけ極楽をとし八て人と
まちし地獄をハ申してて人をおるさて帰善

実をちらしのこり候や実をちらし虚と擬さんや
むすぶ虚をもつて実をちらさんとすれバ数代の余の
大すあらんとやゝすれバ師生の勅徴も君父の
訓諫も如何すれバ理屈の石となりて事とおそく
むらるも師家の温勤も夢とまるべしさながら
必毋固 一貫お(の)四絶の論も儒つよはなせるを
実学ちらしふちて末代の学者かたくの異端とせられん
より荘行の寓言としやし大禅家の空言とかく
こて也去らバ孔子の行状さし一虚実の要るかや
もとして我椛の実をしふ一すむ各や出版の法説
をとるに四絶の表を一字はなし了何とかいう毋
固ととなし 二毋我 ?の名とされバかゆきて不

まよのりなく天地ありてそと一にまよふ時ハ儒者の
大すれハ仁義礼楽あれバしかるとてよき時も
あれバわるき事あてあしき時もあらし世代の変を
としへ絶行し也我を虚空向に再行して非レ敢テ
為ニ佞ヲ疾レ固ヲ也と是れハ孟子も是を引て
了 仲尼ハ不レ為ニ已甚シキヲ一者也 言不レ必シモ信ナラ 行不レ必シモ
果ナラ 惟義ノ所レ在ナり ありしやこも実もて一旦するして
時のよはしまきとそり聖人ハ有徳合ニ於天地一
変通無レ方とて此詞も雨さしく儒者の説
文ちらし有方の学者のあいやりて此方の
聖人と注をむしきされ大かされ枚子の言を設ちる
一おもしく孔子の宮儒をもちていふハ春秋在ニ一字

不實の權謀はかりにして今日の用を達せんとする世
或は昭公の不禮を隱し或は陽貨か爲すると
難は或は齊の鮑牽か國必の患に足をきられ
されは其智之不如葵とまて孔子に例の俳諧
あそばさるゝや　これらの中をもちてあくるに暇あらずして
をも含めて其ゝ万の事通りて儒書に
は優游といひ佛經には遊戯として又これを
其外万の説を善人は善人悪人も悪人もおのれ〳〵娯みとして
事とする故に優游といひ事とすれは竹を
放逸としてうけさらんとて善人は辨まるゝ事あるを
害は一字の好悪とすてんとて孔孟の書をよく〳〵
讀みし仲尼の徳を見んにくるしも字力辨才の

おもむきあらはれんとして今日の我をかへりみて如何
くして五史をさへ二十年の功を積て終に亀息
と通せし一旦に絶をかけて万の歌文ならんとや
すれは絶の畢竟は履くを學ひて實意を
あらは實意をまなひて履をなさんとし又これと
論語の好學をして万の事通しまさらんと欲せ
花實先後　花實の論は次二段の師説にあり蓋
は或物の花實と評して世並にいへる文章の
儒佛の教誡を表むきとかれは實をもちてし花
いまたあれ和かに文章ありて優なれは花
は先にして實を後にする者なりければ花子孫
るは徳の一字を表さしとせて居其實不居其花

ゆゑ智恵ニ辨舌の花を咲せて愚痴のそしりを
なりといふ教誡なり例ニ文教の當用とさだむ
誡ニ和漢の才人といふとも文教の差なきとせざらん
まへ虚実の説のわかちをもおぼろなるべし
其虚道理　叶假ニ俳諧の辨ある事一人のみならく
たとへむかしより男女の愛情におぼれぬは古今
の序と記文とおもへども是へは遊女は賣物なれ
金ニ全盛の客とかくして貧ニ身をもだなき
男とあられむかしくのあいくしたむくして或は
ミな舞妓子の名とそゑくして末ねなるを消さん
人のなくして二たびも寄もし或は蔵翁の田楽を
塩梅よしと附るん人は二たる名におくれて

大名のあさもやぬて時あり又ちよつもとめる讃あれと
実におもむくなし虚にあれくるをもその
機嫌あり抱て柏の形は五門くあれは形は店に
はまりて怒あり彼ら儀の五州あらんよろこび
するありさて喜なり彼ら儀の五州あらんは彼も
両ほく耕もおもしろくなくと諷諌の和説と
いわぬやけりとよ文偏の説なりみざりけれ父子と
主婦とにあらそふ兄弟と朋なとにいくさまな和く
下一ちれぞ従それの本なれは公私の恥くひとん
はくらいてそれにも財の和節とおちくなりて一一そと
利害の説とりして子貢されて子にすおりて不や
虚實見之虚實　白馬敬誡訓るは比俳諧の虚實

さてまた儒仏の説たる内証と例のたとへしてみる
也あるに虚実の虚実しかるを全く儒仏
の内証にもあらずしても綱常の説とあり一
ちてこの意から虚実に実をまされは名利の用
とてさへ虚実に虚をきれは名利の用にもなる
けさるはこれ天の支配にして其付へ理を存一
世にまた山崎の先老も一貫術の大綱を孔孟の
虚実論ありてこれおの大事としあきらけて
この論の題は孔孟を儒家の元祖として
孔子の道を孟子にひろめて孟子は論語の
再記なりしかれし虚実の説は例の似而非(テ)
なりしかれども第一の内証又は孟子の万章上篇

また孔子も周公も蕩(スム)る天子なれは継ぎて天下
とをさめたまひし　孫おもかげにのこりをさめし
ゆゑに孔子の実とまもて孔子の虚とさられ
いはゆるなきもく天道のうちをもつて太極の
一気の動く所より物に虚実の二用ありて天
も虚にはなく地も実にやすらかそれや人間の
ることなりて善をとなへ悪をたおしてれは
それを聖人のをしへよりそれにつれてをしへ
またもちひて善も善なれども悪も悪なれども
それを虚実の書とよりてそれより五倫の定
なかありて父子も仁をもて孝とし一君臣は
義をもて忠とすこしもなく虚実の実をもちれ

孟子の自語相違なるや孔子は仁義をとりふ人にて
天下の君もおそれとなる所なれハ万乗ニて賞罰の
是非とあつかひて天下と一本とおもてゐ君の横柄ハ
いあるまし天下と一万乗とのひにの行儀といへなむ
そもし天命の次才にて未毎の喩へにせよされ
周公もさも亜く卿の宗あらば魯の一国ハ八百年
の宗とすへしと惧の成王も天下の君とありて叔甥
よたゞのごとく下あるも官と禄との天命にして仰宗
されはこそ因果としてふむもたりなされ孔子も卿の宗を
ありて一年すれハ魯国の摂相とありしかハ男女別途道ニ
不拾遺三年而百姓正之矣何但魯国而已哉雖天下
可平と定ふるゆゑのえ了そ誠に天下もその

へつらひしが例の仁義をたてとなへ給ふゆゑ役に立ず
されどもそれハ子孫の追従に名利をもとめて
富貴を得つる事のそしりにいへ諂諛の人ハ此
耳ざわりにて世に金銀の求やすきハ馬の尻に
おはむとしいひてやそて魯国の官禄にくされ
て七十余君とふれんのとしせしにより名利のためと
そしられハ孺子純子の痛悼にやまひ馬の耳
のし敬てさし一道建立の人なれハ金銀の用
それ其事も出ずしてそれをも孟子の心に
千毎一万毎にも何とやしきされ孔子と人がまで
ぬなかりし天をとらぬ文辨なれし世に説く
名利ともなれく名利の天下とそなへてまや

舟をきらふては花をきらふ人に似て是らは
虚実の論にそむきて其体に我家の虚実論
は虚実の虚実にして虚実は名利の用と不用
なるときらひて人間の世法をよくきらひしなへし
不易化　俳諧の常談にいはゆる不易の所は千変万別
に敵し有と辯の有を細の子の意なりと
所謂の千変を俳諧に折りしまれは俳諧は不
易化も不化なるとてふのことにあるとて不化に
流行して花止ある変やされは虚実に不自在
の花ともなさくへし十年の間に学く直錦
をしきおて其中にみなの針をきちとし気
流れは一足に踊へきれし二足とも行

あしきはあやまき花ともいやうらし不たれは之作と
花て一句針のあるなる例のごとく結構人あり
是に俳諧の虚実自在をいへるは手は針と
なりたつる付る思はある人もあは付は忍
まあしれともなと贍前忽後と讃して論説
夫子の胸はなれは温厲の意もしけらひ為二
孝行心　一貫わのれ孔孟論よちれ信不信の辨を
ありて偏の類も家語でも曾参か大杖にて
そのらひて昔舜之事瞽叟索而殺之未嘗
可得大杖則逃走故不犯不父之罪と仕
ちらて信実の天にかなひ聖智の期とをし
て知らるとなりされは孟子の孝論をもて

完廩浚井のむかし話といふ事しるせるはいかにとなれは
みなそれぞれ親と兄とあらそひて国をも論じたまひ子
いつはりなれども其をかぞへは五帝の史記にありて
も儒書にいましめしきは何ぞ言あり倣ふ井戸
のかけたるに庚申の初め様にたわむれ給ふ況や
象がいつはりに子産が校人の詐りをいへば正人
の智恵にもとづく へこれら則の似而大非なるを
も覚りて誠偽の決断をもなさしむ 井にて死生
のさだめなきを へき時あり或は君子可欺不可
罔と云ふ論語の所答にて宰予が仁者の言を
急にいひて井仁の有無をいへるのみなりて
死せる論とは各々かのみならず此詞のひきかへ

も似即似是不是とふ捐似の論もあるはある
へしとおもひけりと白馬非白馬を道訓にいへる是をの
と父子の信実とは両様の認めありて論の大略
をもちて信実をも守る時は同しく人の天徳
みちて索而不得を舜の大孝ちからにまろかれ
とはそれそれ同しからずなせは各用の肉にあつて
をも只臆病のむまにそむいてしいふの差あるに世に
とあつかひて似詐の云への忠を孝とをもちて
儒佛のそへの考証ありてもおよ倫の法に於ての
捷径とすることもあり信実をもて陰徳の名ある
て兼ねてを陽報の名あれはや忠孝をもつて
貴四討の御法あれどもなされとされまでなりて

それ諺やこれらの誹言と作して例の僻中
とりて了ふるなるべし
其實其虚　此段も例のごと比なり世の中の人みな實
いつはりなるよりいやまして虚をおしふる故に記き
かゝりし此故に禪録の詞とありもしへの地獄極樂
とありきなるも提婆が地獄に在なりし圓觀の返
答するよへをも畢竟して地獄も極樂も虚實
も善悪も心の所造なれば冥の彼中の婬しきなし
居虚行實　此一對も我宗家の要文やきるに
他門の宗匠家より此詞を雖しているの雅を
實とみて虚にあるよへをも虚をともして實を
後なるし人要點の作とも知りきるん吾黨

の人此返答に要點のはなれて迂遠なり那説に
今日の現となして一下實をなして五倫と切して實
の實ありて夫妻の實あるをとり來るなき人の
我妻をとりてあそびもに稱して夫妻の實とな
なりて今日の虚にあらさへしおのへ在れあらふ
へきやそれにて犬猫の所りなり今や我門の
虚實とて本よりの五倫を虚なりなしとなりて
夫妻の要あるもかけておもはて人が我妻を
奪ひあそびむとそれ記に五倫の實をとりし
て人の指とさもふあるなり實を那家の那諸
まして世に又も五の丘の此作傳あるへし
是非親疎　此一對も此作の家用なして是非

まん人とさへつて親疎なく我とさる事一些二も
白隼の金言なり夫なれば是非の説といふハ兼好
法師も是をあげて徒然艸に是非の段あり
是なる時ハよろしからず非なる時ハよろしからずといふや
此語を儒仏の連續にあらハれし給ひの論ハ
すべてあれども人向を一方へ非なる中に一ずつ
も是なる時あるハ親疎によりてよろしからず一
とやかくと徒れくの一道として我宗の依怙にし
時宜の一代と違ひして世俗の為用をささへども
そまされみれも儒にあらずして仏にあらず
と古人の鑄形に合ひをもしてさくんらくの
違ひをひくさる所意のすみして童子経

一巻として八宗九宗もさまざまへさてしや其外の雑碎
いふ師匠の徒れくの讃によりてなるべし次に親疎
の説といふハ或ハ親と子の處とたくへ二段の
事ともよろしからず時あるんかも他人のあるけ
ありて或ハ親と子北宗とちがふれく千金
の事ともいふもありハあるんけるをたとへ兄弟
とあふ故にたてうちもし人倫の部あらハ信実を乞れ
との差別ありけるなれ白隼の事あるふして
信実とふるに父子と兄弟と法てさて子直
の師匠とあり美理よりあさて君臣と夫婦し
法さて有益の明なしとあれバ差別いふ夫れ
見て美理とさ為而不恃とみく信実として

功成而不居と至言と釈迦の修行して至聖
は仁の一字ちり人さらには差別なとつきまとへるに君
臣の義理は信実と誠にく父子の信実は義理
をはらけん仲も過きれんとはなにく悲しき
なられいはるしとの喜怒の大切にあり仍る
兄弟も人相とをりて又倫とおそとなる新跡も
虚実のあつかひなれんも世におとしく夫婦とおよ逆
ぞにそまく虚実とはいくへあれども新子と
父母の情をもつぱら白は崇とし人やとあらて美
れ智とおおもん論語の和同れ節つきそ孔子の
褻瀆とおもて人こそ也はれし君臣は義の本
なれはこそ和は公私の要とされしらみに接する

仁

は古の差別なき白馬の教誡の急用として儒者
仲も説されは他に微中も解締ともれる
の終は言よ信用されし
仁義好悪　一貫抄よ此論ありて仁義は好悪の
事とあらたに斉の晏仲が二君に仕へしと
孔子は論語によれば殿の伯夷も二君に
仕へざると知れしく論語になおるて実に
仁義の用といへは仁も意にかられて吝やまで
く義も力はあられて事し少なくし仕れし
仁義も道の仕たとえありて仁をなすぶらは
あられ義も内にありて仁をそし好悪を言ひ
悪人のまるあまりて仁者好人悪人とする

仁中の義をさとしと我はかると只馬琴道は
仲尼の仁義論を評して此は仁義は誠にのかね
ろして風雅の上にも分論なりしつかん孔子の
家法にて仁義の法にかはりて或は良心の
向されも或もち子貢が論されも儒にいれの二字
をもて道の根元とあたりきまたれ孔子
の建(タテ)流として孔の徳ちの愚なれとも世はいさ名
なはずくしてきむなしの心にあらんきされは
あはりとに忠義といい婚冠といい射御と
いい食饗のれやそれもれとも仁義の形容ちかき
宮よきこし儒者も孔門の和節をやすいあるら
そ縁を仰ともきとや孔孟論諌のまあれ

かくて孔子諷諫の和をもちて仁義の実を説
さるより此るて例の旋沮をはらひて一分八向
のそらいあれはかされて七萬おそらく一しのき家よ
て論のことばを辨へ儒者もよし今の時世
をもらて今のれをしかもあらへしまる一字録の
大本なるんとや
分実(ニスル)所無(シ) 此語は禅家の眼目として言語不
到の遺訓なり誠は世界のあらゆる物と皆空と
きわるもやすきれしまも空と実とかのかれと
達磨の郭をとつて似て祥者をよ不済し
此なよ結文よく虚実よ誦の字を預けて
無きとあるはもて実と虚とあり無きをさ等

此に屋も空とおもんで應無所住の心を
はてあるもしやはれぬやうし人の釈迦孔子は〳〵所はる
のつりもけの手伝かれてや世〳〵の肝要きとはいや
しく儒書とも佛經としてるなるべし

言語表裏　傳曰

此は平生の言語の意味ぬあれ
とも言ふ理りの訳あることを心得べしとかく
儒仏の教も巻も表の一方をのみ知りてかと
も裏の一理をさるない文字のよみ浮ぼ此韻
まも及ばてぬすの志れゆ〳〵博学の人も
偏に一文不通の愚者に劣るもあれど
れ此深所口伝を心学文の儒と学ぶべしまういは

耳ともえ志し一方巻の裏を守むより同と嫌ざき
て一理の裏とまうんうるてはれとも言語の表裡
まる要とも偉とのやうとされあれハ顔思しほどと
承弟はらいて小人之言有同而君子有不可察
とうるいしに君子以行言小人以舌言とそる
夫子の返答も例の表むきをも此なまれ子の道
学思の二字を案の一字をもちて何常に学問を
いわり施つりはりなるう言語の案ふ案ハ自己
の塩梅とさるれくねよ一向十知の人ともなるべし

迂詐之真言　搾さられ此二句も彼の虚實の
虚實あれとも然れも意の虚實ずしてその詞
の虚實あらんはうれとも實ハ詞よ實ハ詞の誠僞の

此俳諧の文の遺訓なりん俳諧といふは虚実の実
をおこなひて世代の有用とするなれバ但し
虚実の虚にあそひて世代の無用とするの
ものなりや然ると識文の秘訣ハ其うちに此説
に牛刀の表裏とし論語を意にあるべしと
いふも一派の蔵にいれたり十論を意にあらいず
とハいふハ世のならひをとる然るにも虚の実なり
むもさにに此実の虚なりんも虚実の俳
俳の妻なりして此一段の鼻意を笑話の二字
に勘破さし一きされハ虚実のあつらひを識文の
俳に実とそてなし笑話の遺訓に虚をはかき
て譯なもさにまをひらきて 辨ものもさに賜

あらいさ学者にかくをもとにはんをそちてす誰の
たくみ付に向知さ〜一

第五段

風姿風情 此ハ子をも白馬の常話にして風にも虚
あり雅にも実ありとまにはれハ二様の訳に意あるに
も姿の妾に新なるにもとして雅実にはれ
いふ利としもあり因果としもあり物として風雅に
あそひい詩さもあり俳諧にもおちはれ連歌
をはなとしもいひてにも実のさんなるにし連俳いふさ
俳諧の道地なきん語ろを好いも虚実のさまを
ふきも風の字は以をはなとひきをて俳の虚に

居て宴をなすなれハ優游自在のおもむきあるへし
姿論　師弟ハ姿の先後より子ふれ出たるへハ親と子ハ遠
国よりれて年をかさねハ見ミハさらん老ちやされハ
他人なり名乗れハ深くに恩愛をもちゐて男女
の憎愛も妍醜の姿によるへハ姿の先なる分別より也
儒書ノ工面　按するに師とあり父とあるへし兎角よ
そ子たるへしへむかて或ハをそし或ハおもむきて其れ
を儒佛の勧懲とも二方便とも工面とも云ふもあれハ
孔子の工面ハ子貢ハ巧言をなし又ハ子路ハ屈節
なさしへ季桓子の臣にてやうてまたはさし佛胎ハ
法をもとして仏さしよりて五常を説ありそれをさせて
国とせるゝにて権変自在の二方便なれハあけて

あふ一つきて其ふるもむへきもて孔子の大虚よして
ゐしむへきこゝろ下の小宴なるらん
詩哥ノ姿　遺稿ノ夜話ニ黄門の家訓とひよて
和哥に姿の大切なりそれしんと例ありて姿
をなるへうきよゝ一とせ伊賀の上野にて芭蕉
の服前なるる秋の風とふ句を路の月ねとふ
よ所なるをこもねの姿よに故翁のそりきなれ
あの句ん其十の宴ふとしるへしそれして宴ふ一蕉とも
よしあしちおやしもる付あるへしされ秋たく
て好みて生ひやまひて切翁を服前の子細を
ありて宴ふの材人市をも様の一よなめくち
膳所の曲翠亭にて尾の前がら芭蕉の宴ふ

此ほとゝやて時うつりかの世の至は名の月出の
うかれ出し秋風の姿あらしとはせて背
に似し侍しや是や當句の情をしりて其意
の付所に姿をたくはへたらんは句のまはしも
あしわれし姿の御文にさるぬかしたち侍て稿
の類読みに一句の姿あり二句の露姿あり混録の器
るん紫つの駒追の音とちきり一句の姿とも
い芋のよふの類かして二句の姿とふ附合の形容
ありわ付もれそけ論に莉花をりておかん
ていふ名あらまし

古今一情　一字録の連歌篇に七情の評論あり
情とハ人間の七情にて五節けハ善悪とあり

喜怒とありてみれハまへくるふをみるかくしつい
花れにおもむくかと現を命とし千も情ハ天地にみちて
くてそ歎も鱗甲もかゝわれし姿ハ十躰の
差なあり千情のまゝ句て千姿まてゝ尽くハ
姿をせそとふかむへあらそれまふれハ情いちる
一く姿を新しかる一しま寓ま和家の序字
とうちろま附て尋常ハ連歌のまゝ地とよけ仍也

千差万別　接さるた連歌の家風ハ堂上ハ月花
雲ねまむかひて連歌をそ寄せてゝきれおし
する情はおはあらわれて姿ち珠まとおけ和気
ところし絃管にて千雲をせてきれおかする情い
ゆるかゝして姿を益と見て童舎とちつるをまる花

情をかくされて栄のてにちらてゆゑあり但し對ハ
錯綜して文の優劣を称す

俳言

古菟玖波集とて連歌の集也その中に
救済の誹諧とて歎けるなる曾我の殿五十郎
うかのかりしへと又郎どもよりぞありむしと云ふの
不及化と誹諧とてさあるもれハあきらかよし
へきうハれて古風の老人のことを敬ハむ然て貞徳
も宗因も所を連歌の精をもとハて一字も
俳諧の深かきあるきて誹言なきハ連歌なれハ
それの此の味もなくやうれの時より連歌の式よ
ハ恵と定給のやうあれハし又句作とし三句
去ありあるに俳諧の恵とハずとも壇西鶴も言ふ

それちらして牛玉よ血判の実とをよねいてけり
美女古牢山のつひにくる言のなしかしきるを
古式ならハ清て掛も下帯も恵の詞と云なれと
誹家の式用ならんなきをもいふハあれと詞の恵
とハふれてあり今も古風の誹諧師ハ此一すちよハ猶
よりて誹家ハも風と清めんとしきて俳諧とよ花の
真ならずや恵のあるれもあるきれもあるや
あれハ今の俳諧ハ誹諧連歌のはたなれハ式目
の新古もごとに信ぎと

新古変

新古の論も深義の更経より他行の
奇言怪語たなく清ては新古の沙汰をも
竹秋のうくよからきて和定ならもとしる新句あり

むかしより秋はきたる連俳のちから同
うして暮に暮秋暮秋とすゑにありける
字は姿のあさましきと定めてこれらの句作は
後姿をとらせるゆゑや姿情の二ツとなして
俳諧之連哥といへるなれば遣句類説
にあり
尋ねきたりて姿の論也

連歌ハ不レ知二雲心同意一ヲ若能
轉レ物ヲ則同二如来一ト云連哥の物にも
とよ能文といふて変化自
在のものとなりこれを地と転じ地は転也
らぬ差であるといふ連俳をいひきり言は
其の雲を弁じ他の物と転ずるとして
假和合の姿あり此を姿にしていひて善
悪

雲も執して一句としては姿をあらはして執なしとも
かくは連哥としても地に姿をあらはしては
後あるやうにこれも家の作にも有二ー

耳目明暗 白馬文章訓に俳諧は目にてみ
耳はゆるされ挿家のみ名のあり耳を
と隠でみへの弁証としいて挿さる
さればとこそいひて挿はゆるさる
人の耳でもなく目の挿あるといへ
同じく挿も人の名も同じ二
あるは差も鼻もかはらずに句作の
上手下手あれしかれども十句の中とかくて
耳目にもいはれぬものは俳諧の字に

入る心は第一に意の姿情とせられ第二に耳に
字文とせり一にハ俳諧の聞し不知ともに
年月の功と誇るものあらハ一人の說ぐ斬新
漸く年月の間晴に流宗の数〻の作なりて
耳にさへやさしく聞え意味と手てにはかれんを早く
意にかなひ其外例の字に姿情をなしてその意の
向ひみて又人の耳にさわれて作にも合ハずして
稀に逢ひて自暴自棄の人となれるも當時
まゝある事とあるべし能々つゝしむべきことゝ
言語の上の功ならん
一字一點操りたる象物の姿ありといふ言語の姿と
又三段あり一句の姿より分論して重き二句の姿

とありし故に象物の姿といふハ切麦の吹口と眼へ
物ありけて馬ハ居としきる物とかきて或人の云ク
句の付句を言ふに是を作よみ付句なる人あの
付物をあつかふ者ハ和歌に和付て出しに柳に
ハ馬の尾を云フにあり其の附合を常都に有
とかくる言語にあらハ背中の細月に風とかいて
蒙纔の雅ひける事を示す
をしにて人やそれ楽と對來りてかの附合
いかくれすなハち作る切の吹口と風に
ありけて又句なり誠や風の字より
さるのゆき馬に行に又掛と
らく旅神

是でなびけ衣れく此まる抽て馬上に居として謀
ありて候よ言がくらうれ伯母も姉も又
ゆりもこれ変化のあらるゝさらに脇として
一字より家の貧福も人の多かれもこれの字
も動静のちらかこれ名字の字とこれ試
御の姪抽人にも脈（むく）らんと見ゆるしとある詞と
なふれども是れとよおの理をいふ一字の一字
一點より四方の儀をあらんとて言訳の字子に
まるにぞる子なる親の字をあらるとして市より信して
たれ七字ひ〳〵なまるにぞるゝとあれ親の字をもつてある
見るからの右部よ言語　此二字にも字の字
合より書からして書するに所由もよくかくの

こししぞる子なる年も十八九にて鍬鋒の初も
弟まさやうして在所から二三里とて左る
ただ市塚の町をよるあるんたの紙銀にあて塚
伊達ろしもをもち市の役にて親をも
さのとなる〳〵ぞる子なる年も十二三にて国
らり四ゆり四ゆも見え在まん社の四方の年季
をさしや鮫のあらの兵衛より在所の素飯
とあしらて母よ言語のあとらあてなさらると入る
〳〵まれら一字の詞もらもちの年も入る近
もかくのことくかりらるゝ温妻知言とそう
世代の残なども　これまら〳〵
温故知新　先後ありの大略と所知の字の學

ちかんに例の先師より時習旧聞而毎有新得
則可以為人師としてる何とか新に得んとするや
論語にも多識といひしを耳聞の学とりて
人の師とするにはたらずといへとそちらもかしこも
されは此語を業あるの人のかかとてそれにまかる
のりはなんせんへき何とやらかれ人のくるしも
とこうはちからあれて新きをもむ厨を味い
茶を飲むなりに何よりかれしきやきるの方とちから
ははの変に應していても用とはらけれはくすにあるるも
あるは事とするるを毎りの師しとかしかるる学文
の師とをまれ此師に人の師ともいへとある
師し特分の師とまれとあり誠やこ然なる

いそ冲のちうくなとえてかひて師とも学とてそれを
我言従と伝るむの師近きには何をもなきそれ
丁寧学の自知なるかんと云ひ化や知新のことと頃て
知変の用とはなきりまるをもとなはおのおのかかし

般捷好事　史索隠詞般捷之変学不生詞
猜先生詞好事有読之以遊心駭耳　史起
是は志の発詞なれはほとほと人の用とする

言語形容　捺さるは石設る物の形あくつし詞の
咎と言二字の差あれはあれしなの形容は
郷のちかいあり抑して俗語の辞訣をも言
のゆるとはかりて一言に学を附るつるにはな
き師説ても文章のうえて荘子と見ゆるに

物の形容を唐干の段よりうる詞の形容とは
言顔の論いおゝくゐとかし才ちの評の文論よゐ
見えたり此上あり人の席よて句の脩御起予を
論ずる中に人丈それを揚たのさゝれ侍りしと示
よ人ゝの附合あまたあるも今此所の言えれ
てすゝとなれ出るものとむきゝら今ゝ子揚たの
作たりとあへむきゝらて左設あ得たりとも
遊女をおそく西をたちむけて客をうかゝいて
衣をのほりうちて片膝とりて搭る有りたりとも
あらはそばの形容とて絳とかとの膝の珊瑚
揚きとしとてられ一証の遊人て甲とかゝれて
織よ論説らゝの論法よ申さとや傾城買

又世の評らしとありて節季の覇業之庶
の祖とも業しなり附句の古今に称句の作よ
人とおもとなりて奇言怪説を求むるものか
作らる世論の異見を抑の張らともり詞の張
をまりてそれを財の利とたらけり一字一証の
事おもり言語を以まよ作るもなきなりそ

第六段

曲

節地　遺稿の師説よ曲節地の之旅よ
ありて熟向ろへなし此名よ之地とよくいえは曲
節を財を自然ある抑や作れし曲節を睛業
して円次のやとまて雜ちをなるかりても刀他も

業として一ツことに起せり此ある巻に、様の言を
春をよろしくおもはかるのはしをも宗祇の名とはなけて
ことふ才之の所為にと称の新陳ありて新なりより
新しくてある付句もあり拙きは附られしも様のうち
かくてあらし作者より陳してその俳諧に於てのごとく
尾張の鞍も所の拙きやと判者云ことの如く
俳諧の事あし方とも思ふを専とへは誹拙の所為よ
むかしへは種々を以て之に味て此人を引に立てと
宗祇のさかし方帯のよしあしは一眼界に浮ふ
なよ尾の鞍のとて書きるに及はすとも附の哥
どもやしにはふもあるは耳をもそて丈人は誹お
いふは古今ありたらは當季の発句をたらしあて

それ〳〵句に作る拙の同しことをもて宗祇の再ひ名を
附らしてすへて秋句の作よりて前句の相に句をさて
かくのこときなる前句と於て又さひきらひ賞を
かまれは尾を世界の耳によりてうちなる狂言俳諧と
ありなんとし一慥にとて曲節となきるうちに
あらまし曲節となるへきやうきそれし此となるへきの
かくなれはも慥て之辞のやさみとてふちて熱の
例の発句にして句作に之辞の差ておとなる上
第一なるは此の句すも発句の境次へ本歌となるへき
て速に云発句の中より不案なるは境次と様
のうつりして本歌は趣向の時あらはる誹拙
の日比修行ありなるはなりてとて一詞に雀よ

とらふ子のかくさるゝかそれと読き其の寄特といひ
て信せらる甘への如とあり信をうる附ハ程應
なるはれと書句を要まして佐れは此地と
飛花落葉一 才二ハ節のはやわち發もとら
の家なる修蓮ゐそて譲云題もて外化様まし
て句いと語として いむらこし 拙は修蓮ハ所合
の照しててと所言ハ色きてもてふまるゝと
例の風格ハ大事よするその張勢あるゝそれ
とそらして今はやかをむとよふあるしけりハよ
らよとひよありて大武か遠ゝ駒返て公任の
譲と信せし一風格ハ細和哥の詞まして細諧
ましてそれともなすかひともて不や第三ハ曲めす

ありへち趣ちて百人一首を知て抜て俳諧曲と
ら字て時の要なしてがをとりて学ぶ拙きハあり
もて天は電光霹靂のごとく人の耳を驚
うして論きれハあとかくも赤拙ありけ句そ
梅の様のに表書のあしらひて句偏りしてさそ
はた所にらり此なかなさ人は百人一首とらくよせてあるを
俳諧の眼目をゆるくするやそれを八雑まく俳諧とい
て曲節の中此大嫡ありされハ之所のわりきつた
発句も附句も趣向をもとめして句作を後の
事なるべしとあるなり
結構人 此詞ハ白馬の諷言あり結構とハ地を
うちらへて表むきとかざるかすりなれとし人の字と

孫が時をせんには勝のへとこゝろへしれば此論
の論語の評は此詞をもって孫子とうけて
一貫すの里仁の篇に仁者能好人能悪人とも
論語一部の節といふは仁者天下の民を慎
みて撫育へしのこさぶへうきて此なは再献て
仁者てかゝるへし勇あれ共勇者は仁かならずしも
仁あらぬとこゝろへたまふべし是孟子の論は天下
の君と天下の師とをいひて天下を治る好悪を
せられしまゝを賛し仁とを評せられて師は二座
より好悪と云りて仁とをまもりてこそ是れ
天の主配りして人の撫育はあるまゝなり一なれ
是れは此後の章の意にて仁者悪人といふは信

夏人ところ和中の一節をさしといふべし
骨折所 按さるに此一章をあらはしてしるす
かくし骨折りなし秘せらるよの師中の用を
辨ずる一人をまねすに骨折りてたゞあらず
はたらくやうなるを連覧して優游自在とし
藝能あって各人業を世俗あって大名風
をもってなされと学者はまれにしもとかしし骨
折りなきは理のある所にして秘せらるなれは理の
あるはちあれは従ふやうそれ秘にあらさるべて
学ぶべき孔子の所の論は此なは師家の文時八あら
陀羅尼の三字に秘密をたもたれ何の書
文字も春秋の三字に曲節をつくむさしれは

其説ハ師をとりて学ぶ者ハなき物にして師説
学びて知るべき物なれども此ハ我の師とはいはゝ
其信ぜられて疑ハざるわけて学ぶれべき節ハ
ともあれ是に向ひ然しも理にかなふるとし
俳諧の放埒とそちらちあるものと依れの眼
力より拝勝の二字をとりて此章を[illegible]きうし
思ふもあさゝの辨あるべし

和説　史記郭舎人賛ニ發ㇾ言陳ㇾ辭雖ㇾ不ㇾ合ニ大道ニ
然モ令ム人主ヲシテ和說セ云々　摂まりに史記にも和説ハ
雨月ハ物ありて悦と説とハ通用とやまうるに
先師の古文ハ村にもたれ標ひさ疵まるとて
説ハ字の評論あり亡れハ説ハ字の音訓ハ輸蘇ハ

切ハ論説とりて輸芮切ハ説誘しあれこそ説代
をも説代とていひ作説をも作説といひ説と悦
とも通用あり　説にみなおな悦の字を用つき
に漢家の文章の字ひかりすこしへ流書ではれ
のようひあはし抛して我家の字去違ハ启
の書物を刪りて宗人の非とあるこそされハ
古文にもこれらの錯おほしかりして杜の蘇のこと
きこと字釈の一班の吉ならぬれに好童無戯の
れ詞あらんとそもまうれハ十論の用ゐるこれもと全て
人和の説誘とえらり部首の真名ハ大和詞にハ□ハ
六藝ノ節　一字録の儒師ノ篇に一節といふ字の
こと此あり頼迎して世ばの屋をとりて靈を

先ハ説の人ハ御学者にても虚ニなれて　さて虚の
癖とちらするとおもハしき孔子にも世代の宗とさら
て宗となさは教の中ハ儒学者にも宗とおもハれて
さて宗の癖とちらするとおもハれさして　世ハさし　虚
宗の虚空とさふときて　虚空ニハ虚空をと
なれりなれハさちて　ハ道の虚空とたなれりとらふ
釈迦も孔子のちに不虚も虚空も合点して
一同一答まこそまいちて　ときも人ハ受たまの
さまかりてまで学者ハ　かれをうけそまかる
ね詞のそこうもかなきこそかく　さふやとその
らさかてハ中あつて　それぞの奥まで知え
隠らるん　なれと唯心所造ても随類得解とも

それと在る仏法ハ和尚の中ニ極まりあらハきての人なりて
さてのうちなれハ名人の法ニ入るものハ人の分ある
分あらんにそれをさけんとするものハ道理のものなれ
ものハあるして　癖とさハふして人からや　けて癖ハ
才十段の判者の下にを見をへし

撰集　遺稿長話ニ撰集の事あり　雑談あり　雑云
なりハ撰集を何ぞ人ニハ沙汰の出と許して曲節ニ
人とまたいはや陳云ての所謂あり　釈迦孔子の
説教とてハ手をもちて今日の人々まとそれぞれを
昔の人ニして其の世なれハ一年の事まとさるも
ともそ拝をまして万巻あらんに滅後ハ門人の事
皆よりなされ其中の曲節とをくらて儒書とも

それ佛經も宗旨をさして道はなしゆゑあるべし
あらずして道といふものあらずして知者能自知を
いは儒の表裏とさだめんのこゝろやむとの内證をつくれば
うつてかへしたるに仁義と道の實としては禪宗には
經論とはの惑としてとて學者たる曲節の法縁を
きゝいてもはなして面々の宗をかゝげて靈点
の方便ちゝる世をうろる商人のまつ責知
とはしきうことく道は建立の分を立てしいふも
ゆゑをや孔子の子貢をとらへて一枝の玉と童
らせのそろかりして沙諾の店をとがとんば辨くて
家の商賈たるべしや それで老子の道をも
禪ちるの寂寞はさるとしたとも實に論をたし撰

集わくを辨るは論たるに手の地とをとなて細よ
称くるなと工夫きらした撰念集一物の曲節を
はづそて世界の目ともくろみし物に称すらす
をまたるあつりは是を一斬一切斬としいて
称し称ねとく一理あれし儒の称すると大扶
て称あるなと信はきろべきや

道心　按まるに此語を四書の字と對として孟子
の詞をいふとそれしか文を論語によりすぎつるや
二扶を孟子篇上に善人君子善人とあれども
有恒人をとろ事かとに此語の説才は上の文に
それの善人と恒とあるべきも孔子は儒の表裏と
一貫とへいふしは此語のつゞきて悪人君子は見あり

ごとく常の人にして上れの悪あれとももつて言
と甲けは志うも曲節ありて万ろうちて心は一物の理
をしるときて録の衡木は應ずるごとく地は
をく時もて変ちろ一く曲はをとく時もて老ちろ一し
志れは道の極まりて今く心代の心治りして
又その言語も時のあるいあらん况や此段の諸文は
非ずもちろん人をもてそとこと沖子の所勝地の得
のまこと心をも巳をとやあるるの象りして細説は
ま信と表をなしせ

第七段

其故 梅もろに手為と子ろち十論一郷の大本なり
仰揚とも何なる一方代の靈をせうして儒書は
此も何ろは一説の定をせうきとして子ろう家
の意業も五倫の因は愛なし法ち連綿の道
藝にもして喜ふの喜怒哀楽も此は何な
は愈済して何なる筆を缺てもなくて採く
而もとこれは此れも儒仏も老荘も同じとなる
ころ人をぞうちると和漢の博学なりと子ろあり
書籍をもちすとおはして手をひらうくして全返
をもてて所をて所はそれともらいみその中子流
学而をとふて学者の道の暗くまとる
論語にいその学者をゆへしなして不向は之何
如之何者吾未如之何也学而不思則罔

思而不学則殆とも終日不食終夜不寝
以思無益不如学也ともいへり此二章ハ学の事をし
思ふとに学文の先後あれバ理をしれるハねがハくハ師
をえらびて学ぶ其のうへにて後に思ふべしおもふ
てねがふところハ師に如く行ふべしといへれバ
○思○故とあれバとやそのそしりて書するハ彭四の恩を
あらハし視観察のことを学ぶものなり此辨を
才十段の法式の下に見えたり

下手　師説にきくとハ学ぶとハ敬誠の差なあり
先人のりよを孔子の詩よりあとへ下て誡あれ
いまハりてもち恐と懲させて学ぶのりよを
告禁にしるて慣むべき媚もあるかれバありて

も善を勧むと一しいふと孔子の門人に対して
おはし言説の学あれバあらはして子貢をともへ嘗我
をいはうし彭回もそもの善を云はしいて子路をい
いふやうけのうちのそを良謀の砭剤にして
勧懲の三用とあるへしとぞ誡や世界のために
善悪いそのほかに兵のくあれバ其をしへなり
のこすをはかりに善をあらハし悪をわきゆへ
とたれのこすれハ合六方にかなひて地に貞数
貞の秋はあるよし老仙を慣むる事をありあり
てその仙と愛さるれともあれバ徴をもかへと
祈るむへからずしてまたいはにもあきらかへうらの次
一三次の訓ちを師恭の方位して寺をうちすてしぬ

と恥へくおそれをよく憚とえて慎へしかなわち
儒書も仏経にもみなもんの用ふして勧懲
いわ况の喩をとやきへちるへし
十年道接するん此段の趣りよ十年往て十年
罷りかふと月のの咲るとふふへきも八十
よも九十刹那として一念の間の往来ありて人のん
の和よ對する時ハ 神念いふへりるらわあり
りけとも之迷ての時よ詐らり咲うと悪人を
いハ詐よそくふと思人ともいふことを打起て
世のかよあるふと仏説の調さハ娟人とてふ世界
の守ちれをれこと趣しんとて様様とたてく
金銀と清いやもしらる弁と趣そてりと抗

おなふして渡世の渡りもあとへ戻るてもなかく
い詐の一念ふて三段の人氏差ふると知れるくも
尊とおもふへし 偖て往来の往文にも云ふらく
関とむるをふふ附合よ打起めてゆの心に
忘れへくて飯向と云ふらに或ハ鎌倉のか
あり或ハ秀衛の駄と書きてたるの類も
二ありてるをえてふたまよたありてされと
所々の飛向とも云ふ趣向とおもふしるあり調の
表裏に御活あれハ定なき乱世と書きて下
とて仲間よ巴ら母とおもふせてとも寄るを
同備も具足かの戻り方も例のよさぬくよ
曲節を所々に飛の備るへく見るなき

これらハ誹諧よ関東輩とハあやなりさる
かくし曲節も節目のかくはあれハとて例の誹
よりもはハかくをいふやの嫌下の入にあらすとも
きこの間はいへれハ十分ならさるし一息の間
なかれハて「およそ誹諧ハ馬よ出来あいて
誹諧に曲節とわかるゝ人もあるへからさ
る　一七言八句の物まねにて釈し釈ハ
のまつりもおしさ次の附句にむかふ附いふへ
の出格と考へて例の誹諧をすへし上手
も下手も兎人て多人ハおなし出会の法ハ
あり釈のなかくてもし両を一つとしかりのよ
誹諧は俳諧の道にて世間の法をはいはし「て

俳諧の字ハ史記よりいてゝ事の…およそ云々
游心和説よ曰二誹は史記の稽あり又今文
あり詼諧ハ漢書にありて東方朔枚皐ら
賛あり唱嘯ハ韓子にありて多言とかけて
も全くは士農工商に文章の筅言と妖れをも
其事其理　俳諧は往古の事を学文の尾にさかり
こゝろをいかにして遠からす書方様ニ知らぬとも
それをまるは唯一ありけれは論語に以帛布
多学而識之者與予一以貫之とこのもの字
のちてこゝよあり一以貫とそつけれはありけれ
曾子と子貢とは学問に精細の差にてあれハ
一貫の教も二用ありし…

ハずの問ふ者に応じ問ふ者にこたふ　弟子あまたありて
答ふるにてきみ亦孔子にあるをはかる一言も
の言をとをつゆらに一部の論をもてはかりしめ
見聞のみに帳をもちさためしそれよりも人の
事とせんて問ふ者にまかせて答ふる事なり然ば仏は
天眼天耳通とて重宝の中で最も優れ
うちて巫祝のはなしにて論ずるは甚しき錦繍
とかきれしも人をそこねて貴賎をもとめて
黄金をついやしても一言をとき利鈍
をもちてと仏法の眼耳通をたてふもはなはだあるを
の所作は肉身のものは世界一面に声ある節
あきらかにして字をもち紙の字に近く

稲荷大明神の御利益のお前と耳にきけば人の問ふに優
きられて誰ぞ比をもつ名将の九郎とも太郎とも
云へりとや今の仏法の天眼ありて一天の男を
看破されし堅固の布子の袖にしはしみて
秋田坂田の米売なるを撿しても飛脚に
うりわたしたるを所へしけるを所にあらばこれ
所なる死活にまかせるもの大がかりなる仕也
ありしは六根の上へ通ずる者の経はきまつの久敷
茄子田楽のあるひとかきたし　庵主の和尚の
葉あるは　あつき粥をとをくり出しかかわる
まかせて自らとして眼あのさるとてそれぞれ
嫩くて味なれ乃の味ん入れての事は弟子

知口

設の法式のごとくなれども人各とも一し
不知 知らずとは定家の常訓にして俳諧の的と
不ぬとと云ふは拝するわざなりつゝしみての言句
とふかはあらでちれば世代の上には謹ミつゝしみ甚
も禄ことはけ書益もなきとかやされども風雅の
中にも俳諧は例の富座実の和歌と云ふて世代
よろ利の用ともなれは富きもわが身も定かし
まもやさことおもひて人とやらんけふとぞよらんとそ
世代の中は北大陽と云ふべしたゞものや笑言と道
とさむに人とやらんる諷諫を云ふさえたことなき
云ふも遊戯と云ふもされ鄙義よりまたれは人の
なりんまるとましいもせんる俳諧の

附

言句とまうさでも儒師のる遠よりもよくはへらん
俳諧の席にありしからて世代の一れとまうさとや
合ノ変化 拙者に上より下よりの一対は動静のたとひ
より秒ふと云ふ人の平居ちちとそり地して談義
のかよりもふ俳諧の仰とは不ぬならず要説は理す
の部のことやある庵の雲の曲節をとかくてよ宜しく
とかるもりてよろ紙のたくてそれは
い宣旨に耳をかたむけて官女すらは十二ひとへと
めるものなるは我まゝなる禅とかけるとまた要
まいのあるとよくも静なるれとはてまて
よろて歴くの源氏の雨にて木像の旅まで
栄耀を守るもとし小相と成ときけ跡のかきより

ととむべし翰をとりてはまづ其大意を
三段に定めて入用を考へ十二種の内いづれの
よし雅俗の本意を失はずして言ふべきやう
かくのごとく綴りかけたる句中にはかならず句作
の功不功ありて虚字の動静一段の差別あらん

傳曰

蓋思　按ずるには詞を時宜の一切に論旨を述べ
して蓋ちなみに文格の解なり言は万差の
書とあるは文と散とのふたつを辨ずれば儒家の
論説に文章の主意をおきたるは佛家の法華に
教誡の要とおもひけんこそ家の書なればにあらじ
は宗の文たるをよみあらはして地の形容を現はし

あらわれ地の所謂て韓文はなくとりて集は清
といふとも只文教ともいはばさとも知るべし
ちらと雅俗の法をも四家の内作をも入れても
徴をとりて儒仏の本勝とけして節るは
今様の竹斎よりも勝しきは儒書に仰せ
これ人の気の情ありて地獄なり人の命なる
は極楽なり何とて實の境界をもなれ人言
語をもちて文章あれば字に一字餘して
それより体は雅俗の上のみは一編の起結を
入て文章の應容とされたるや近くては雅俗に
の字にもちて文の雅俗と取捨をいたすや

四六文法　文式は四字六の句をかさね字を對し句

を對し意も對するをはねといへり詩には言
六言あるハかきりて或ハ三言も五言も或ハ四八
とも八句とも前長後短の拍子もある一しきり
と詩も歌のみ七言にして文章の四六ある語路に
奇偶の用をなせる風韻をたゞしく四六これにも和歌
ハ五七の拍子にして更に拍子の雅俗をもなすべし
されハ四六ハ漢魏の間よりおこり李唐の世にも起ハ
ゆれし趙宋の比にいたりて今なほ禪宗の
疏類に用ひ侍りて文法にねたる名をなせや
其格を王勃が滕王閣の文勢にして一定す十七才にて
絶倒師を測ねに達なの風骨ありとや文章
ハ禪宗の盡宗に在らり

を對し[illegible]

[illegible]或ハ[illegible]

[illegible]前長後短の拍子とある[illegible]

[illegible]其の[illegible]文章の[illegible]語路[illegible]

奇偶の用[illegible]

[illegible]の拍子[illegible]の雅俗[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]主動[illegible]の文[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

6209